-遊星測候所は次元の"中継ステーション"なんですよね。このユニークな着想はどのあたりから?

こういうの、SFの諸作品にはわりとあります。例えばW・H・ホジスン著『異次元を覗く家』ではアイルランドの片田舎の廃屋が。タルコフスキーが映画化したストルガツキー兄弟著『ストーカー』では、ゾーンという場所がそんな感じですね。そうした中、クリフォード・D・シマックという人が書いた、その名も★14『中継ステーション』という、味わい深い名作があるのですが、この作品が好きで敬意をこめてイメージを御借りしました。

先程言い忘れてましたが、この方も50年代アメリカSF黄金時代を代表する作家で、他の作家が都市文明を築くのに忙しい中、シマックはどこか牧歌的で、宇宙的ノスタルジアともいうべき温かみのある作風が多くの人々に愛されてる方です。

『中継ステーション』も緑なすウィスコンシン州の古い木造の田舎家が舞台で、表向きには外見30才位の男がそこでひっそり暮らしているといった設定です。名前はウォーレス。特になんの変哲もない家だし平凡な農夫なのですが、実は年令124才。全銀河系知的種族間交通物質転送装置!の地球人代表管理人なのですね。そしてここが銀河宇宙の旅の宿であり交差点になっているというわけです。ウォーレスは異星からの旅行者をもてなし、彼等を送り、この「中継ステーション」を守りつつ、地球人が銀河系種族の一員として宇宙に出ていく日を、静かにひとり待っているっという--。 3次元の自分の小さな住居も、ちょっと郊外にあるし、時折訪ねて来るのは、異星人みたいなんばっかしだし(あらゆる星の!)まぁ相応しいのではと…。

太陽の黄金の林檎



★13『太陽の黄金の林檎』レイ・ブラッドベリ/早川文庫 「霧笛」からはじまる珠玉短編 集。

中華大方一次

★14『中継ステーション』 クリフォード・D・シマック 著 (早川文庫) 最近再版さ れ嬉しい限り。ラストエピ ソードは思わずぐっと胸につ まる感動の名作。

-印象的なタイトルヘッドイラストレーション。特に青い空が…またコラムカラーというかそれも青っぽい…

有り難うございいます。遊星青(プラネットブルー) といいます。遊星測候所オフィシャルカラーです。 -赤いドームが3つあるのはやはり…。

本来の意味とは違いますが、ヌースコンストラクションの最初の頃のやつをイメージしました。今は タカヒマラテンプレートから、ケイブ・ユニバースに進化してきましたけど、この当時はまだヌースコ ンストラクションが生きていましたので、それをイメージしてやったんです。

あとは天文台のあの、半球体のドームが非常に好きだったんですね、あのイメージがね。天文台がある場所っていうのを僕は実際、見たことがないですけども、岡山天体物理観測所だとか、東京三鷹国立